

下張り文書から垣間みた今泉元甫

鈴木 友和

公立学校共済組合 近畿中央病院

今泉元甫(享保17年・1732-文化5年・1808)は山脇東洋門下で、豊後佐伯藩八代高標の侍医であるとともに仁慈の町医者であったと讃えられてきた人物である。山崎佐は緒方惟勝著『杏林内省録』の記述を引用し、「今泉玄甫^(ママ)は、実に医道に透徹したものであって、医師の亀鑑とすべきである」と註している(日本医史学雑誌 1943; 1320: 361-363)。このように元甫は半ば偶像化されてしまい、反面彼の実像は殆ど知られていない。

演者は元甫堂(旧元甫邸)が平成10年に取り壊された際襖の下張りから回収された、元甫の実生活に係る数多くの文書を解説・研究する機会を得た。そのうちの主な4文書について報告する。

「簿」は元甫が安永3年(1774)正月~同5年9月の2年9ヶ月に京・大阪に向けて書き送った書簡の控である。保存状態は良好で、比較的容易に時系列に整えることができた。文書は堅紙を四つ折にした折紙に16丁に亘り端正な字体で書き綴られ、主な宛先は京都に留学中の養子元橋である。文面は養父・師匠としての細かな心遣いに溢れ、医学上の疑問を率直に元橋に告げ、「諸子へ質問給わるべく候」と教示を乞うている。またしばしば医書・医療器具の購入を依頼して4冊の医書を購入したことや生薬用の植物を試験的に栽培していたことが判る。さらに「山脇ニテ婦人刑罪ノ者ヲ屍ヲ解キ見ラレ候由、此事東洋先生より度々之事ニテ候。(中略)罪人ニモセヨ、人ノ屍ヲ屠解スル事仁人君子ノ用心ニ非ズ。(中略)是等ハ師家ノ法ニテモ深く交ラヌヤウニスベキ事也」と述べていることは注目に値する。

「処方録」(仮題)は寛政9年(1797)~享和元年(1801)の4冊がある。堅紙二つ折の折紙に概ね丁寧書き留められている。紙は変色して破損がひどく、正確な時系列は判別困難であった。患者の階層は上級藩士から庶民まで幅広く、その居住域は大多数が城下である。処方内容からは元甫堂が内科疾患のほか小児科疾患、耳鼻科疾患、眼科疾患、産婦人科疾患や性病の診療に当たっていたことが窺われる。

「薬種之御通」は薬種商の安土屋庄兵衛が元甫堂に納めた生薬の通帳である。文化3年(1806)と同5年(1808)の2冊がある。保存状態は不良で、辛うじて時系列に並べ直すことができた。紙面は簡条書きで、納品月日・金額・生薬名・重量の順に記されている。当時元甫は70歳を超え、診療は殆ど元橋・元迪(元甫の孫)らにより行われていたと考えられる。これらの文書からは元甫が日常診療にひたむきに取り組む姿が想像される。

「買米帳」は元甫の米・麦・粟・大豆の購入高、支払方法などを記録したものである。特異な点は1回の米の取扱量が石・斗単位で、「御蔵米」「預ケ」「カル」などの用語が頻繁に見られることである。そのうちの天明7年(1787)は、大凶作で飢えている領民のために元甫が不時に備えて蓄えていた扶持米100石を献じたと伝えられる年に当る。この文書はその事蹟を裏付ける1史料として興味深い。

以上の4文書は元甫の人となりや医師としての姿勢、仕事振りの一端をよく示していると言えよう。今泉元甫は演者が医学の系統や学派を超えて日本人医師固有の職業倫理観を探し求める過程で出会った、極めて興味深い人物のひとりである。